

おおたによしつぐ つるが 大谷吉継と敦賀

大谷吉継は、豊臣秀吉の家臣のなかでも五奉行につぐ地位にあった武将です。とくに、諸国の検地をはじめ、九州攻めや朝鮮出兵の際に、食料や燃料、弾薬などを補給する兵站奉行を務めたことで知られています。

天正17年(1589)には敦賀の領主となりましたが、秀吉が吉継を敦賀においた理由は、全国統一が進むなかで日本海交易の拠点としての重要性がますます大きくなってきたことが要因であると考えられています。

領主となってからの吉継は、前領主の蜂屋頼隆が笙ノ川河口付近に築いた敦賀城を拡張したり、それともなう町の整備などにも務めました。いっぽうで、小田原攻め、奥羽出兵、朝鮮出兵など、秀吉が天下を取るために行った戦において重要な役割を果たしました。

関ヶ原の合戦では、石田三成の率いる西軍に属し、中心的な役割を担いましたが、徳川家康率いる東軍にあえなく敗れ、関ヶ原で自刃し、その生涯に幕を閉じました。

また、敦賀城も、吉継没後に発布された元和元年(1615)の一国一城令により廃城となりました。

こういった事情から、吉継の足跡を敦賀でたどることは困難ですが、現在市内に残されている寺社文書から、わずかにその功績をうかがうことができます。

なお、吉継にまつわる伝説は数多くあり、一説に不治の病により、頭巾姿であったことや、吉継の息女が真田幸村の妻となったという伝承も残されています。これらは確証はありませんが、吉継像を語る上で象徴的な話といえるでしょう。



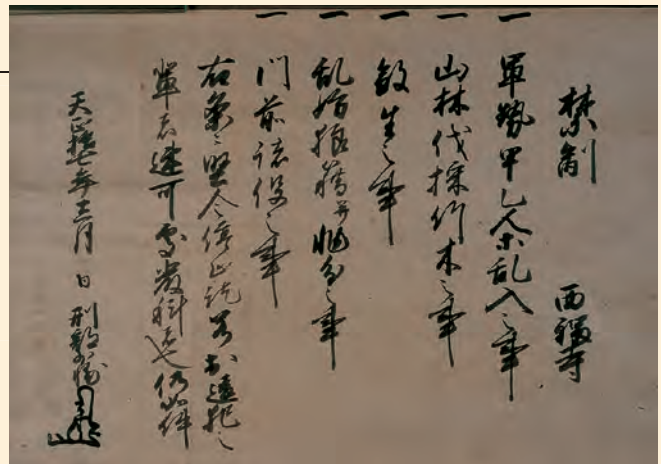
大谷吉継肖像(個人蔵)

敦賀領主として

大谷吉継は天正17年(1589)に敦賀5万石の領主となりました。この所領は敦賀郡を中心に今立および南条^{なんしやう}両郡を含むものでありました。

敦賀は交通・海運の要衝として重要な地であったため、秀吉は能吏^{のうり}として評価の高い吉継にこの地を治めさせたと考えられます。

吉継は領主に就任してからも度重なる出陣のため、敦賀にはほとんど滞在しませんでした。遠方から家臣を的確に指揮し、領国の経営にあたりました。



大谷吉継禁制(西福寺所蔵)

禁制は、武士や軍勢の侵入を禁止する事項が書かれた文書のことです。その土地の支配者が発布するものです。天正17年(1589)9月に前領主・蜂屋頼隆が病死しましたが、同年12月に出了されたこの禁制から、すでにこの頃には吉継が敦賀の領主であったことが窺えます。

敦賀城の拡張と町の整備

蜂屋頼隆により築城された敦賀城は、吉継により拡張されました。城郭は、現在の結城町^{ゆうきちやう}を中心に、三島町1・2丁目に及ぶ範囲にありました。

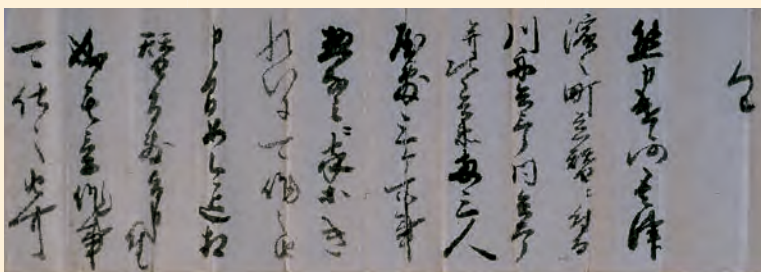
この城郭の拡張にともない町の整備にも力が注がれ、敦賀城内に攻め込まれないように城門付近の道を入り組んだ構造にしたり、城の近辺に侍屋敷が設けられたりしました。

また、商人や職人など、それぞれの職種ごとに分業した新しい町立^{まちだ}ても始められました。



「敦賀町絵図(享保年間)」(京都大学文学部所蔵)

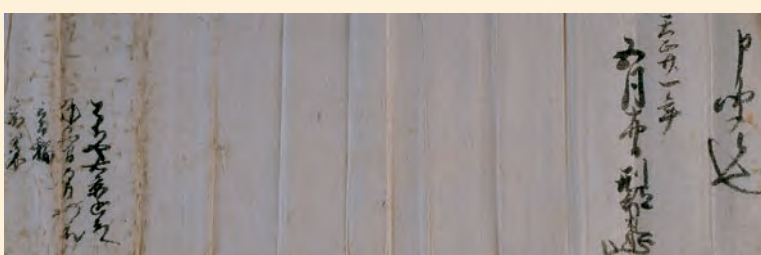
江戸中期の享保年間に描かれた町絵図です。吉継当時の町立^{まちだ}てがほぼ同じような形で残されています。



「大谷吉継判物」(真願寺所蔵)

道川^{どのがわし}氏は、川舟座^{かわふねざ}の中心人物として、海運と商売によって領主権力と結ばれながら財富を蓄えた初期豪商の一人です。

この文書は、敦賀城の改築により道川氏に住居を移すように伝えた免許状で、この移転により海運業の中心は、旧笹ノ川^{しやう}と児屋ノ川^{こや}とに挟まれた「川中」と呼ばれる町域へと移りました。

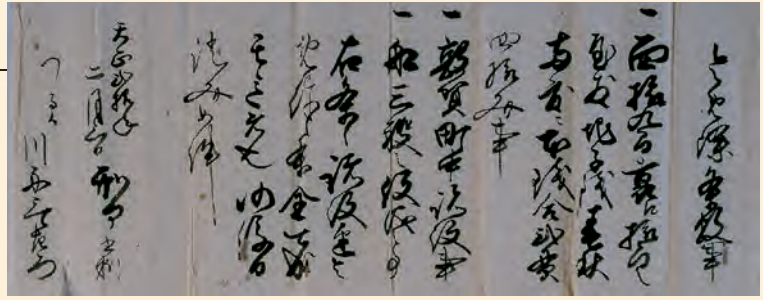


敦賀湊と吉継

敦賀は日本海運の中心となる湊で、北国の物資が集散する地でありました。

陸揚げされた物資は、琵琶湖の水運を利用して京都や大阪に運ばれたことから、敦賀の湊は重要な拠点となりました。

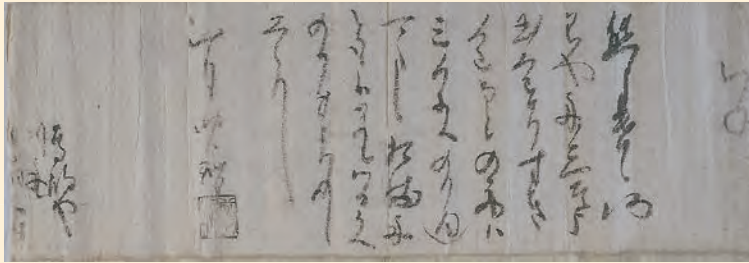
敦賀には、伏見城の築城に用いられた『太閤板』が、秋田から敦賀に運ばれたことを示す記録や、吉継が出兵の際に物資や舟を調達している記録なども残されています。



大谷吉継諸役免許状写(真願寺所蔵)

吉継が道川氏に宛てた文書で、^{じし}地子・^{しよえき}諸役・^{かいえき}権役の免除の特権を与える旨が記されています。

これは、吉継が朝鮮出兵の物資を調達するために、道川氏に協力を求めた見返りとして行った措置であると考えられています。



大谷吉継書状(真願寺所蔵)

本書状は、吉継が北国舟三艘、玉葉、鋤、鋏を高島屋や川舟座に求める内容となっています。

おそらく、何らかの出兵に備えて物資を供給しているものと思われます。

また、舟を敦賀湊へ集結させていることから、この地が重要な役割を担っていたことが分かります。



敦賀市内に残る大谷吉継関係文書

大谷吉継諸役免許状写	1通	天正20.2.3	真願寺蔵
大谷吉継判物	1通	天正21.5.14	〃
大谷吉継伝馬扶持状	1通	文禄3.3.6	〃
大谷吉継諸役免許状写	1通	慶長2.2.29	〃
大谷吉継黒印状	1通	慶長5.8.2	〃
大谷吉継書状	1通	年末詳8.4	〃
大谷吉継書状	1通	年末詳8.8	〃
大谷吉継書状	1通	年末詳9.21	〃
秋田実季書状	1通	年末詳10.22	〃
大谷吉継判物	1通	年末詳12.25	〃
大谷吉継禁制	1通	天正17.12	西福寺蔵
大谷吉継書状	1通	(文禄2)11.26	〃
大谷吉継書状	1通	年末詳12.24	〃
大谷吉継書状	1通	(慶長3)6.29	〃
大谷吉継書状	1通	年末詳12.11	〃
大谷吉継禁制	1通	慶長2.11.17	永建寺蔵
国印頂戴二付永建寺願書写	1通	天和3.11.1	〃



「越前国絵図(慶長十年頃)」
(松平文庫蔵[福井県立図書館保管])

敦賀城は元和元年(1615)の一国一城令により廃城となりますが、廃城前の慶長10年(1605)頃に作られた古図には、当時の敦賀城の様子が描かれています。

関ヶ原の合戦

慶長5年(1600)7月、徳川家康の会津出兵に参陣するため敦賀を離れた吉継は、ひとまず垂井たるいに着陣しました。

この時、佐和山城にいた三成から家康打倒を打ち明けられた吉継は、一度は挙兵を断念させようと説得しますが、三成の意志は固く、結局西軍に属することに決めました。

一説によると、この頃、織田信長に滅ぼされた三好義継おんに音が通じるのを嫌い、吉継を吉隆に改名したと言われています。

この合戦で、吉継は中仙道の防備にあたり、山中村の藤川台に陣を置いて東軍の奇襲に備えましたが、小早川秀秋こばやかわひであきの寝返りにあい、形勢不利となって敗れ、あえなく関ヶ原の地で自刃しました。



「関ヶ原陣立図(年未詳)」(長浜市長浜城歴史博物館蔵)

大谷吉継関係年譜

和 暦	西 暦	一 般 事 項	大 谷 吉 継 関 係 事 項
永禄 2	1559	織田信長、岩倉城の織田信賢を攻め尾張統一を計る	一説に、この頃吉継が誕生したといわれる 他に永禄3年・5年・8年説などがある
永禄 3	1560	桶狭間の戦い	
永禄 11	1568	信長、足利義昭を奉じて上洛	
(四月二十三日) 元亀元	1570	姉川の戦い	
(七月二十八日) 天正元	1573	室町幕府滅亡 朝倉、浅井氏滅亡	
天正 2	1574	秀吉・長浜城主になる 信長、伊勢長島の一向一揆を平定	秀吉に召抱えられたのはこの前後と言われる
天正 3	1575	長篠の戦	
天正 4	1576	信長、安土城を築城	
天正 5	1577	秀吉、播磨を攻略 上月城落城	秀吉のお馬廻衆として播磨攻略に参陣 秀吉の上月(こうつき)城救援に従軍
天正 6	1578	秀吉三木城を包囲、兵糧攻めにする	
天正 8	1580	秀吉、三木城を攻略	
天正 9	1581	秀吉、鳥取城を攻略	
天正 10	1582	本能寺の変 山崎の戦い(秀吉、明智光秀を討つ)	石田三成、検地奉行となり山城から検地を始める
天正 11	1583	賤ヶ岳の戦、北庄城(柴田勝家)陥落	蜂屋頼隆、敦賀の領主となり、敦賀城を築き始める
天正 12	1584	秀吉、居城を大坂城に移す 小牧・長久手の戦の後、徳川家康と和解	石田三成、五奉行の一人になる
天正 13	1585	秀吉、従一位関白に任命される 秀吉、四国攻め、長宗我部氏を従属させる	吉継、刑部少輔に叙任
天正 14	1586	九州の島津義久、大友氏を攻撃	吉継、堺奉行を兼任した三成を補佐
天正 15	1587	バテレン追放令 秀吉、九州攻め	三成・吉継・長束正家「御扶持方渡奉行」となり九州出兵で活躍
天正 16	1588	刀狩令	吉継、後陽成天皇の聚楽第行幸に随行
天正 17	1589		敦賀領主に就任
天正 18	1590	小田原攻め(北条氏滅亡) 秀吉の全国統一	三成・吉継、館林城、忍城を攻略 三成、佐和山城主になる
天正 19	1591	秀吉、太閤となる	
(十二月八日) 文禄元	1592	文禄の役	朝鮮出兵において吉継・三成・増田長盛ら総奉行をつとめ渡海
文禄 2	1593	豊臣秀頼誕生	敦賀郡内から朝鮮出兵の水主が徴用される 吉継、明の講和使節団を伴い帰国 三成・吉継・増田長盛ら越後で太閤検地
文禄 3	1594	秀吉、伏見城を築城し、移る	三成、島津氏の領国を検地する
(十月二十七日) 慶長元	1596	秀吉、朝鮮への再出兵を決意する 秀吉、キリスト教徒26人を長崎で磔にする	三成、増田長盛・前田玄以・長束正家らと連署血判して秀頼に忠誠を誓う
慶長 2	1597	慶長の役	敦賀郡内の塩年貢改めを行う
慶長 3	1598	豊臣秀吉死去 朝鮮派遣軍は撤収	三成、朝鮮派遣軍を撤退させる
慶長 5	1600	関ヶ原の合戦	吉継は戦場で自刃したといわれる